

日本ペンクラブ主催のシンポジウム「戦争と文学」が東京都内で開かれた。安保法制の制定や9条改憲の動きなどで「戦争前夜」とも危ぶまれる時代状況の中で、文学はどんな役割を果たすべきなのか。会長の浅田次郎さんと冲方丁さん、志茂田景樹さん、松本侑子さんら作家たちが意見を述べ合った。(石井敬)



「戦争と文学」について浅田次郎さん(左から3人目)らが意見を述べ合った。東京都内で

紀夫の死んだ場所に行ってみよう」といふ動機で自衛隊に入った経験がある。「こうした環境に育った私が戦争小説を書けなかったらひきょうだ」といふ気持ちになった」と執筆した理由を語った。

### 死者への責任

『終わらざる夏』の連載時について「前半では戦争経験者から『こういう言葉遣いはいらない』と痛烈な批判の手紙が来て、びくびくした。後半の戦闘場面に入ると『何を書かれても決して批判できない人たちがいる』という、死者に対して責任を持たなければならぬ恐怖感があった。それは前半の恐怖とは比べものにならないほど大きかった」と振り返った。その上

で「私たちは反省して戦争を振り返り続けてきた。その努力を決して無にしてはならない。憲法九条には手を触れずに、できれば九条を一条にすべぎだと思つ」と述べた。さらに浅田さんは文学のあり方について「(社会性のない)志賀直哉の作品を読むと『これでいいのか』と感じる。思想性やテーマ性なしで成立する文学はおそらく日本だけ。私たちの世代は主張していく文学でなくてはならない」と覚悟を語った。

冲方さんは「若者の間に『この国が戦争状態になつてほしい』という気持ちがある。経済格差が広がる中、『みんな一緒になりたい』『もう一度ゼロに戻ってほしい』という思いと、戦時中の一体感に憧れる気持ちが芽生えている」という認識を示した。「若者たちにどんな物語を提供したらいいのか。戦争を放棄した江戸幕府前期に私

### 覚めた目が必要

志茂田さんは兄が戦死した経緯を説明し、「私が五歳の時は銃後の子供として戦争を覚めた目で見ている。今の時代には『なぜこんなに熱くなつてしまつたのか』という覚めた目が必要なのではないか。それが文学の表現ではないか」と語った。

松本さんは自著の『恋の蜃山崎富栄と太宰治』に触れ、戦中戦後に誠実に生きたく知人としての太宰の姿を紹介した。詩人金子みすゞの小説を執筆中であることを明かし「人は必ず時代の中で翻弄される。みすゞは大正デモクラシーの中で童謡という素晴らしい文学を書いたが、軍国主義の時代にそれはすべて否定され、死後六十年ぐらい無名だった。そういう時代の恐ろしさが伝わればいいと思つて書いています」と話した。

会場には約百人の聴衆が集まった。ペンクラブ平和委員会(委員長・梓澤和幸弁護士)は今年秋と来年三月にも「平和」をテーマにしたシンポジウムを開く予定。

## ペンクラブ「戦争と文学」シンポ

浅田さんは二〇一〇年に刊行した長編小説『終わらざる夏』で、千島列島の旧ソ連軍との戦闘などを描いた時のことを話した。

浅田さんは戦後生まれだが、父親は敗戦間際の一九四

# 「主張していかなければ」